

2025年7月10日

校長 岡 利道

部活動 点描 ～琴部～

今回は文化系に戻り、琴部さんにスポットライトを当てます。現時点で、顧問2名（外部講師1名・本校教員1名）、部員4名（2年1名・1年3名）です。

まさにエンジョイ・プレイング・コト！ 部員の皆さんは、五線譜ではなく和楽器用の独特な楽譜を見ながら、あでやかな音色を奏でています。

たいへん歴史があり、創部は昭和46年（1971年）で、週2回の練習でスタートしました。主として、校内の文化祭で演奏を披露し、拍手喝采を浴びてきました。外部講師の沖野公子先生は、そのころからの指導者で、今もなお大師範として教えていただいております。ありがたい限りです。本校教員の顧問は、井上尚子先生で、日々励ましてくださっています。

部長は2年の上野さん。前年度の本校卒業式。卒業証書授与が、琴の生演奏の中で行われるのが本校の特色です。習い始めて1年の生徒でありながら、立派に琴の調べを響かせてくれました。岡はフロアの方で聴いていましたが、うっとりするような音色でした。



上野さんと顧問の沖野先生との合奏で、いわゆる「掛け合い」もなされ、変化に富んだ演奏でした。大勢の前ですから、上野さんは随分緊張したと思います。後で聞いたところ、その終了後、ふだんはあまり多くを語られない沖野先生が、たくさん褒めてくださったと、喜びを語ってくれました。このように、沖野先生は褒めて伸ばしてくださる指導者で、生徒としてもモチベーションが上がるそうですよ。

昨年度、上野さんが3年の先輩とともに活動したことを振り返ってみましょう。週3回の練習で、そのうちの1回は沖野先生に稽古をつけていただくという形です。その他の日は、自主練習をして、技術の向上を図ります。上野さんがそもそもなぜ琴部に入ったかと言うと、ズバリ一目惚れ（ひとめぼれ）だそうです。KO・TOという言葉の響きも気に入ったとのこと。

文教祭や卒業式の前は発表に向けての練習をし、発表前でない時は、気になる曲や弾いてみたい曲、好きな曲の練習です。文教祭では、お茶席の余興として、箏曲小曲集を中心に、「花」「三段の調べ」「平調子」などを演奏したそうです。3年の先輩は早くに引退して、当日はたった一人での演奏でしたが、来場者の皆さんから声をかけてもらったのがとても嬉しく、やりがいを感じたとのこと。聴いてくださる方のことを一心に思い、時には心を和らげたり、時には心を弾ませたりできるような演奏をしたと、上野さんは回想しています。素晴らしいことですね。

現在は、1年新入部員の秋岡さん、津田さん、奥平さんと一緒に活動です。伝統を守るべく、目下練習に励んでいるところです。これまで心細い思いをしてきたことから、後輩たちが困らないように、何かと相談に乗ってあげています。琴の演奏の面だけでなく、勉強の面でも。

この春、それでも上野さんがとても不安だったことがあるそうです。4月10日に、新入生と2年・3年の先輩たちとの対面式がありました。本校にとって、そして生徒会にとって大切な行事のうちの一つです。後半のところで、クラブ紹介があります。先輩たちが新入生に自分たちのクラブの魅力を伝え、部員獲得をめざします。

琴部の順番が来ました。たった一人でステージに立った上野さん。あらかじめ演奏を録音しておき、当日それをBGMで流しながら、アピールと勧誘のトークをしました。沖野先生との合奏だったのですが、自分が弾いたところのミスがわかり、心穏やかではなかったそうです。それでも、何とか終わりました。

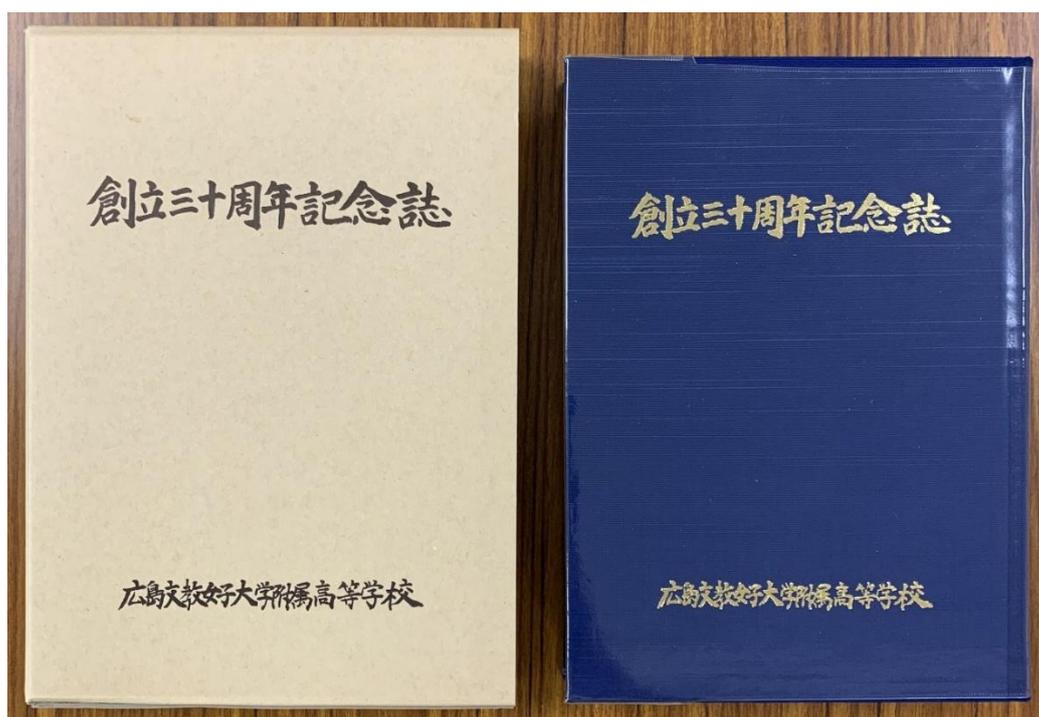
日を改めて、新入生が体験入部する時となりました。琴部の会場は、本校の和室です。琴部の日がすぐそこに迫りました。前の日は、茶道部です。上野さんが様子を見に行くと、大勢の新入生の姿！ 「あー、明日、琴部にきてくれるかなあ」と不安もピークに。



結局のところ、けっこう新入生たちも集まり、先の三人が入部を決めてくれました。上野さんはその時、「この三人を大切にすぞ」と決めました。今後の夢は、後輩三人たちと一緒に活動を盛り上げ、校内だけでなく、対外的にも琴の魅力を伝えようということ。「私が在籍している間に、コンクール出場までできればいいなあ」との言葉が聞かれました。ゆくゆくは全国進出できるように、後輩たちに願いを託したい、とも語ります。そうかあ、みんなで応援するよ！

本校旧職員の上森六三先生からのメッセージ

上森六三（うえもりむつみ）先生は、昭和40年（1965年）4月1日付で、本校の理科教員として入職されました。昭和62年11月7日発行『創立三十周年記念誌』（発行者：広島文教女子大学附属高等学校、出版社：第一法規出版）の編集委員もお務めになりました。主として、「第二章 設置科の変遷」における「第四節 普通科の歩み」の責任者でられました。そこでは、普通科設置の経緯、教育課程の変遷とその特色、学習指導、生徒指導、進路指導、教育研究・研修、学校行事について記されています。保護者の皆さまもお読みいただくことができますので、どうかお気軽に岡の方にお声かけください。



他には、前掲書「第六章 座談会」の「第一部（昭和28年～昭和43年）」における現職員出席者として、「第二部（昭和44年～昭和60年）」における現職員出席者として、それぞれ発言され、その記録が掲載されています。

クラブ活動では、科学部の顧問を一貫して務められたのが上森先生です。最後は、教頭先生として退職されています。それが、平成12年（2000年）の3月でした。本校に35年間お勤めになられたわけで、上森先生のご業績はとても紹介し尽くすことができません。そこで、今見つけることができた資料の中から、私なりに「上森先生は、こんなことを大切にして、生徒を教えてこられたらうな」という部分を選んで、皆さんにお伝えするようになります。標題とした「本校旧職員の上森六三先生からのメッセージ」には、そういう意味を込めています。

まずご紹介するのは、本校生徒会年報「はばたき」第10号（昭和62年3月1日発行）に掲載された、3年B組担任だった上森先生から卒業生に向けての言葉（一部）です。

アルバムの寄せ書きにも書きましたが、「健やか」という言葉を贈ります。この意味は体が丈夫で強くたくましいさま（～育つ）と、気持ちがしっかりしていて健全なこと（～精神）です。卒業は次への出発点にあたる。これからの未来に対して皆さんの健やかな成長を祈っております。



どうでしょうか。理系の先生らしい、理路整然とした述べ方ですね。「育心育人」ということを、上森先生なりの解釈で綴られているという気もいたします。続きを見てみましょう。その時期は、先の『創立三十周年記念誌』を編集しておられた関係で、次のようなお考えが示されます。

今年は高校創立三十周年を迎え、秋には記念行事が計画されている。本校の歴史を色々の角度からひもとき資料を集めている、多くの教職員・卒業生によって創られた素晴らしい足跡があることです。過去の足跡をたどることが出来るのも、当時の資料が残されているからです。「はばたき」もその一つで、十年の歩みがある。

いかがですか。本校での勤務の合間を縫って、記念誌の編集をこつこつとされている上森先生のお姿が目浮かぶようです。おっと、これだけでは終わりません。卒業生へ、個人でも記録をしていくといいですよと呼ばかけられます。

個人の歩みや家族の出来ごとについても記録にとどめておくことは大切なことで、当時の社会情勢や自分の考え、出来事などがメモや日記をたどることにより、よくわかります。このようなことを考えるようになったのも年の所為（せい）であろうか？と考えながら記念誌の編集にとりくんでいるところです。

現在、生徒の皆さんは、フォーサイト手帳という記録帳を使っています。「個人の歩みや家族の出来ごと」、「社会情勢や自分の考え」などをどんどん書き込んでほしいものです。保護者の皆さんや私たちにとっても当てはまることだと思います。

最後に、とっておきのお話で締めくくらせていただこうと思います。次の写真をご覧ください。



上森先生からお聞きして、是非ともここでご紹介をと思いました。向かって右のものは、ついこの間、上森先生を囲んでクラス会が開かれた時の記念写真です。(お一人だけご都合により、お顔を出すことを遠慮したいとのご希望が寄せられましたので、加工させていただきました。不自然な点があろうかと存じます。お詫び申し上げます。) 本当に楽しそうですね。上森先生のご満悦そうな表情から、また同窓生の満面の笑顔から、それが伝わってきます。懐かしい話に花が咲いたことでしょう。今でも教え子から慕われているのは、上森先生のご人徳からでありますね。

向かって左のものは、本校昭和51年度の卒業アルバムより、当時の3年C組の集合写真です。皆さん、とてもいい表情で写っておられます。中島校舎がバックです。歴史を刻んでいます。

上森先生とは、今年4月の学園創立記念日に、記念式典に先立って行われた恒例の物故者法要のお席でお目にかかり、ご挨拶させていただいたことからご縁を賜り、このおたよりにつながりました。心から感謝申し上げます。その後、上森先生から、かつての本校の教育活動がわかる貴重な資料をお貸しいただいております。それらの資料を基にお伝えできますことを、また別の機会に、生徒の皆さんや保護者の方々に向けて発信させていただ

くつもりです。

本稿の最後にあたりまして、ご協力いただきました上森先生と旧3年C組の同窓生の皆さまのご健康とご多幸を心よりお祈りいたします。